

「神をほめたたえよ」

ルカによる福音書 第1章67節～80節

説教 村上修平牧師

ロシアの文豪トルストイの作品に『靴屋のマルチン』という民話があります。マルチンは妻や子ども達に次々と先立たれ、最後に残された息子まで亡くなりました。生きる希望を失ったマルチンはお酒におぼれ、毎日怒ってばかりいました。そんなマルチンのもとに教会の牧師が訪ねてきて、傷んだ皮の聖書を修理してほしいと聖書を置いていきました。しばらく教会を遠ざかっていたマルチンでしたが、その夜久しぶりに聖書を読んでみると、なんだか心が落ち着きました。『神様、もう一度私の心に来て下さい。』マルチンはこうお祈りして寝ました。

すると夢の中に神様が現れて、『明日あなたのところに行きますよ』とおっしゃいました。次の日、マルチンは朝からそわそわと神様がおいでになるのを待ちました。窓の外を見ると、雪かきをしていた老人が苦しそうに座り込んでいました。マルチンは老人を家に迎え入れて温かいお茶をご馳走しました。それから、赤ちゃんを抱いた母親の凍えそうな姿を見つけました。マルチンは母親を家の中に入れて、赤ちゃんにミルクを飲ませてあげました。母親はマルチンに何度もお礼を言いました。すると今度は、りんごを盗んで叱られている少年の泣き声が聞こえました。マルチンは急いで出て行って、りんごのお金を払ってあげました。そして、『もう盗んではいけないよ』と優しく少年に言いました。

そうしているうちに一日が終わりました。とうとうマルチンが期待していた神様は現れませんでした。けれども、その夜夢の中で神様はマルチンに、『マルチン、あれはわたしだよ。』と語りかけました。『そうかあれはみんな神様だったのか。』マルチンは、今日出会った人達を通して神様が出会って下さったことに気づきました。この『靴屋のマルチン』には、『愛あるところに神あり』という副題があります。私達が誰かを愛する時そこに神様も共におられるのです。そして、神様は思いがけない形で私達に出会って下さいます。今私達はクリスマスに向かうアドヴェントの時期を過ごしています。アドヴェントには『到来』の意味がありますが、神様は確かに私達の世界に『到来』して下さったことを私達も信仰の目を開いて気づかせて頂きたいと思えます。そして、心から神様に感謝をして、主イエスのご降誕を喜びましょう。

ルカによる福音書に登場するザカリアは、神様の到来を待ち望み、熱心に祈ってきた一人でした。ある日ザカリアが神殿で奉仕をしていた時、天使が告げました。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。」(1章13節)ザカリアも妻も高齢で子どもを望める年ではなかったので、ザカリアは天使の知らせをまともに信じる事ができませんでした。そこで、ザカリアに子どもが生まれるまで口が利けなくなるという試練が与えられました。ザカリアは全く会話ができなくなって随分もどかしい思いをしたと思えます。しかし、子どもが生まれて再び口が開かれた時、ザカリアは聖霊に満たされて、神様を賛美し始めました。「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。」(1章68節)

ザカリアは沈黙の十ヶ月間、自分の身に起こったことを黙想していたと思います。心を開いて聖書を読み返し、『もう一度口を開かせて下さい』と神様に祈りました。そして、ザカリアは神様の憐れみに気がついたのです。「これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」(1章78～79節)この「憐れみ」の原語は『腸』という言葉で、『断腸の想い』と訳されることもあります。生きる希望を失い、暗闇と死の陰に座している私達を神様は深く憐れんで下さる。私達が孤独な時、自分の犯した罪の重荷に苦しむ時、酒に溺れ、周りの人々にあたってしまう時、神様は私達を愛するあまり、腸が張り裂けるほどの痛みを覚えられるのです。そして、私達を救い出すために、私達の所に駆けつけて来て下さるのです。主イエス・キリストは確かにこの世界に、私達一人一人の心の中に来て下さいました。

どうぞ心の耳を澄まして神様に祈り、信仰の目を開いて日常の出来事を振り返って下さい。きっと、『あれは全部私だよ』と語りかけるキリストの声に気がつくはずです。キリストは困った人々を通して、老人や母親や子どもの姿で今も私達に出会って下さいます。私達が互いに愛し合う時、キリストも共におられるからです。

(記 村上修平)